



### 【成果の概要】（800字程度）

唐詩を模倣する方法を強く意識する古文辞派は、実は『伊勢物語』など日本の古典を詩に読み込むことがある。杜若洲・墨水（八橋・隅田川）など『伊勢物語』に関係する名所を読む古文辞派の詩では、王孫と春草という組み合わせが多用される。天皇の孫である業平を王孫と表現するのが理解できるが、注意すべきは夏に咲く杜若の詩に、春草という言葉が使用されることである。その表現を調べると、王孫と春草という組み合わせは、唐詩では極く一般的な表現であり、離情を吟じる際によく使用される。元となった典拠は『楚辞』招隠士である。杜若洲・墨水の詩を創作する際、唐詩に留まらず、古文辞派の詩人は原典である『楚辞』をも意識し、業平と屈原を重ねて理解していると考えられる。

業平と屈原が類似しているとは、朱子学者にも、現代の国文学者にも見られる考えであるが、古文辞派は、『伊勢物語』を典拠にしつつ、唐詩・『楚辞』の言葉を使用することによって、詩に重層的意味をもたらしている。このような表現の手法は、和と漢の人情が同じという「和漢同情」の思想に基づくものだと、本研究によって指摘できた。「和漢同情」という文学観が前提としてあれば、理論上、漢詩という枠組みの中に漢の言葉を用いて、和の人情を十分に表現することが可能になる。『伊勢物語』を描写するとき『楚辞』の言葉を利用したそれらの詩は、「和漢同情」を実現しようとする試みだったのではないだろうか。

さらに、和漢同情という観点からみると、古文辞派が唐詩の模倣のような詩を作ることは、ある種の正当性を持っているようにも解釈できる。和も漢も、その根底にある人情は同じであれば、人情を表現するための手段である模倣は、形式通りの漢の人情だけではなく、和の人情をも表現することが可能になる。和漢同情という文学観は、古文辞派の詩を考える上で、必要で不可欠の概念であると指摘した。

### 【研究業績】

2013年12月7日

京都大学国文学会にて「古文辞派の詩における和と漢—『伊勢物語』九段と『楚辞』—」を題として発表した。

### 【通信欄】